

《研究ノート》

エッセイに現われた

ホーフマンスタールのドイツ観

井上修一

1

通常、日本で「ドイツ文学」という呼び方をする場合、その中にはドイツの文学だけでなく、オーストリアの文学、大部分のスイスの文学をはじめ、およそドイツ語で書かれた文学ならすべてが含まれている。明治二十年、日本で初めて東京帝国大学に独逸文学科が創設されて以来、「ドイツ文学」は常にドイツ語で書かれた文学の総称であった。ドイツ語の *deutsche Literatur* も事情は同じで、多くの場合、*deutsche Literatur* のことを意味している。しかしながらわれわれには、ドイツ文学がドイツの文学とは限らないという点を、ややもすると見落ししがちな傾向がある。そしてまた、ドイツ人というと、われわれはとかく質実剛健でなるプロイセン人のことを念頭に浮かべるため、プロイセン気質の文学が、そのままドイツ文学であるかのような錯覚に陥りがちなのである。しかしなが

らこうした思い込みは、ドイツ文学のもう一方の柱であるオーストリア文学に対しては、かなり公平を欠く態度と言わなければならぬ。

オーストリアという国は、言葉の共通性もあって、一方では確かに、ドイツを中心とするゲルマン文化圏に属しているものの、歴史的にはむしろ、オーストリア・ハンガリー君主国を中心とするハプスブルク、つまりスラヴ文化圏として捉えられることの方が多い。そしてこのゲルマンとスラヴの中間に位置するオーストリアの持つ二面性は、オーストリアの文学者たちの創作活動にも、いろいろな影響を与えてきたのである。

ホーフマンスタール(一八七四—一九二九)は一九世紀前半にグリルバルツァーによって確立され、ライムント、ネストロイに受け継がれてきた、伝統的な演劇を中心とするオーストリア文学の、自他ともに認める最後にして最大の継承者である。従ってホーフマンスタールは、オーストリアの二面性のうち、プロイセンを先頭に政治的にも統一を見、国家として急速に力をつけつつある隣国ドイツが旗を振るドイツ文化圏よりは、政治的には事実上滅んでしまい、最後の形骸をとどめるのみのオーストリア・ハンガリー君主国、つまりハプスブルク文化圏の方に、より大きな関心を寄せていたことになる。実際、生涯の後半は、現実には終焉を見たかつてのハプスブルク文化を、グリルバルツァーやカルデロンなどの先人たちの力を借りることによって、文学世界で蘇生させることに捧げてしまったのである。彼のこの無暴とも言える壮大な試みは、現実感覚の欠如だ

という批判⁽¹⁾はあるものの、オーストリア人にとってのハプスブルク文化の重みをわれわれに教えてくれる。

しかしながら、ホーフマンスタールが母国オーストリアに思いを馳せるとき、その視線は伝統的なハプスブルクの文化の影にだけ向けられていたのではない。好むと好まざるとに拘らず、オーストリアの持つもうひとつの一面であるドイツ文化の方が、彼を放置しておいてはくれなかつたのである。そしてホーフマンスタールとハプスブルク文化との関係が、言わば追憶恋慕の関係であつたのに対し、ドイツ文化との関係は、現実の世界史の要請するところでもあり、かなり生々しい、愛憎相半ばするものであつたと思われる。

2

ホーフマンスタールの作品系譜を見る限り、一般に言われているように、彼が伝統的なオーストリア文化へ傾倒して行つたのは、『チャンドス卿の手紙』(一九〇二)を書いて以降、つまり創作活動の中期に入ってからのことである。しかしながらこの傾向の芽生えはもっと以前に遡れる。そもそも創作活動の当初より、オーストリア文化のためのオーストリア文学を意識し、ドイツのドイツ文学とは一線を画そうとしていた気配がある。それは若い頃のゲオルゲとの往復書簡⁽²⁾にも見受けられるところであり、これはオーストリアの固有の文学などというものの存在を認めようとならないゲオルゲと、意見がくい違つたところでもある。

ただ、このホーフマンスタールの心の底流にあつたと思われる、ドイツ文化とオーストリア文化との差異意識は、多くの場合単なる底流にとどまつて、具体的に両者の特質、相違を検討するまでに発展するには至らなかつたのである。もともと彼には政治的発想はなく、現実政治の力関係による困境などとは無縁な審美家であつたから、オーストリアに対する偏狭な愛国心もなければ、排他的な心情もなかつた。ホーフマンスタールが持っていたのは、伝統的なハプスブルク文化に対する愛着で、従つてまた、その中心であつたオーストリア、ことにウィーンに対する愛着であつた。滅び去る文化への、悪く言えばドン・キホーテ的とも言える執着という一点を取ってみても、彼に政治性のなかつたことは首肯できることであらう。

従つて通常は、ハプスブルク文化への個人的な愛着が、現実に存在するドイツ文化との関係と、さしたる葛藤もなく、ごく当りまえのこととして共存してたと考えられる。しかも彼のこのドイツ文化に対する姿勢は、愛着という形こそとらなかつたが、関心の度合い、理解の深さにおいて、ハプスブルク文化へのそれに決して劣るものではなかつたのである。それは次に挙げる一連のエッセイが、何よりも雄弁に証明してくれよう。

ホーフマンスタールは『ドイツの小説家』(一九二二)、『ドイツ読本』(一九二二)、『ドイツ語の価値と名譽』(一九二七)という、広い意味でのドイツ文学に関する三つの選集を編み、それぞれに自ら序文を付したことがあつた。詩、戯曲、評論、小説と、多方面にわたつて活躍すると同時に、文学者仲間の間

でも評判の高い、大変な読書家であったホーフマンスタールにとって、いかにも相応しい仕事と言えよう。この三つの序文にもうひとつ、『国民の精神的空間としての著作』(一九二七)というエッセイを加えた四編の文章は、いずれもドイツ文化を広い視野から概観したもので、文化論としてはかなり質の高いものとなっている。

なかでも、ドイツには高尚な言語と民間言語しかなく、国民一般が相互に接触し交際する、中間の言語が欠けている点を指摘し、ドイツ文化は飛翔能力に優れるが、安定した国民の顔がないとする『ドイツ語の価値と名譽』、ならびにそれを踏まえて、中間言語に優れるフランスとの比較文化論に發展させ、フランス文化は社会性を特徴とするが、ドイツ文化は社会性否定を本質とするとした、『国民の精神的空間としての著作』は、その視野の広さ、洞察の深さにおいて、特筆されてしかるべきものであろう。また、『ドイツの小説家』に至っては、カロツサをして、ホーフマンスタールの作品すべてが忘れ去られても、これひとつがあれば、後世から感謝されるに価する、と言わしめたと伝えられるほどのものである。そしてこれらのドイツ文化論を述べるとき、ホーフマンスタールはオーストリアをドイツと等置し、「われわれドイツ人」という表現を用い、ドイツ文化の特異性に、自らのアイデンティティを見出しているように思えるのである。

3

しかしながら、ドイツ文化に対するホーフマンスタールの姿勢は、いつでもこのような同一化の方向をたどっていたのではない。彼にも、その関心がオーストリア一国の歴史や現状に集中し、ドイツとの関係を分けて考えずにはいられなかったと思われる一時期がある。第一次世界大戦中の一九一四年から一九一七年にかけての頃である。なぜならこの時期にドイツとは性格を異にするオーストリアについての、いくつかの注目すべきエッセイが集中的に発表されたのである。

今その主だったものを発表年代順に列挙してみると、『わが国の外来語』(一九一四)、『破壊でなく、建設を』(一九一五)、『われわれオーストリア人とドイツ』(一九一五)、『行為と名声』(一九一五)、『オーストリア文庫』(一九一五)、『文学に反映したオーストリア』(一九一六)、『ヨーロッパの理念』(一九一七)、『オーストリアの理念』(一九一七)、『プロイセン人とオーストリア人』(一九一七)などである。これ以外にも、個々のオーストリアの作家、芸術家、歴史上の人物などを扱ったものが相当数あり、それを加えれば数は倍増する。これはホーフマンスタールにとってはかなり異常な時期であった。ホーフマンスタールは作品の中でこそ伝統的オーストリア文化を蘇生させようとしたが、オーストリア文化そのものを生の形で論ずることは少なかったのである。P・C・ケルンはその異常のほどを数値で証明している。それによると、全エッセイを書かれた時期に従って戦争を境に三つのグループに分けてみると、戦中のグループのなかに占めるオーストリア論の割合は、シュタ

イナール編全集の頁数で計算して八十一、四％にものぼると言う。然るに戦前は、自作解題や人物論までもオーストリア論として勘定しても、わずかに十二、四％、戦後でも二十二、六％にすぎないのである。もちろんこれは第一次世界大戦中のことであり、ホーフマンスタールの愛して止まぬオーストリア人ハンガリー君主国の命運がかかっていたときである。従ってヨーゼフ・レートリヒが指摘するように、「戦争がホーフマンスタールに深刻な影響を与え」、ホーフマンスタールが「リアリストに変わり、政治家になり」、自国の文化と歴史を、またそのドイツとの関係を問う直す必要に駆られたのであろう。さらにオーストリアに対する関心と理解を得るよう「外国に働きかけようとした」面もあったと思われる。事実先にあげたエッセイ中で、『ヨーロッパの理念』は中立国スイスのベルンの市民ホールで行われた講演のためのメモであるし、『オーストリアの理念』はスイスのチューリッヒの新聞『ノイエ・チュルヒャー・ツァイトゥング』に、『われわれオーストリア人とドイツ』と『プロイセン人とオーストリア人』のふたつはベルリンの新聞、『フオッシュシユ・ツァイトゥング』紙上に発表されたものである。いずれにしろこの一連のオーストリア論は、ホーフマンスタールの中に長い間伏流として流れていた、ドイツとオーストリアとを分けて考える傾向が顕在化した姿なのである。

しかもこれらのエッセイ群の中には、オーストリアをドイツから分けて考えるだけでなく、両国の相違点そのものをテーマにしたものがふたつある。『プロイセン人とオーストリア人』、

および『文学に反映したオーストリア』のふたつである。いずれも短いものであるが、なかなか含蓄の深いエッセイで、先に述べたドイツ論の卓抜さと考え合わせると、ホーフマンスタールは結局エッセイのジャンルでいちばん良質の仕事をしたという評価が生まれるのも、納得ができるのである。

最初に挙げた『プロイセン人とオーストリア人』はドイツ人の典型たるプロイセン人とオーストリア人との特性を比較したものとして有名で、両者の特性を「全体として」「見た場合、「社会組織」から見た場合、「個人」として見た場合の三つに大きく分類し、それぞれを表にして対比してある。「全体として」の中で述べられている両者の根本的違いを、分かりやすく言い換えると次のようになる。

プロイセンという国は人工的に作られた、もともとは貧しい国であるため、国の財産と言えようなものすべて、人間が作ったもので、人間の中にか力がない。従って国をまとめ維持して行くためには国家意識が必要で、道徳が求められ、能力が求められる。一方オーストリアの方は、歴史の織りなす綾から自然に育ってきた、もともと豊かな国で、国の財産はすべて外から、神や自然から受けついだものである。従って国をまとめているものは郷土愛であり、敬虔さと人間性が求められている。

これだけ国の性格が異なれば、そこに住む人間の性格にも当然ながら大きな違いが生じよう。その違いの例を「個人」の中から一部拾ってみると、

プロイセン人	オーストリア人
独善的、思いあがりの教師 臭 危機に立ち向かう 権利を求めて戦う 他人の身になって考えられない	はにかみ屋、虚栄心、冗談好き 危機を回避する どうでもよい 他人の身になりすぎ、自分がなくなる

といった具合である。両者の特質、長短所が的確に捉えられていて驚嘆するばかりだが、これだけ本質的な相違があれば、ホーフマンスタールならずとも、ドイツ文化圏に組み込まれてしまふのを、いさぎよしとしないに違いない。もともと水と油と言ってよい。ヘルマン・ブロッホによれば、ウィーン人にとってプロイセン人は不快な存在だと言う。元来、プロイセン人という種族は、その力を評価されることはあつても、愛されることの少ない人々だと思ふが、これではウィーン人に限らず、オーストリア人一般からも、好感を持たれてはいたはずがない。もちろんこの表だけを頼りに、ホーフマンスタールはドイツ人が嫌いであつたと結論するのは余りにも軽率だが、ドイツと運命を共に戦うことになつて、ドイツとオーストリアとの性格の相違が、それまでにもまして意識されるようになったと推定することはできる。

『文学に反映したオーストリア』においても、ドイツとオーストリアとの違いが、今度は精神性の面から論じられている。ドイツ精神の担い手たちは、言わば牧師の息子たちで、精神の飛翔の高さにおいては優れているが、飛ぶための道具である翼が見えなくなるまで上がり、飛翔しすぎて風土との糸が切れてしまふ欠点がある。一方オーストリアの精神は、文学畑を例にすれば、百姓のせがれのポエジーで、飛翔の高さにおいてはドイツの敵ではないが、その代り、常に故郷と結びついている強みがある。道行く人を眺め、通りすぎる誰にも微笑みかけるが、決して故郷という母のスカートを離さない子供が、オーストリア人の姿だと言うのである。

ホーフマンスタールの抱いていた、オーストリアとドイツとの特性の差異については、これでそのおおよその輪郭が明らかになつたと思ふが、今ひとつ面白い例を引用しよう。戦後の一九二二年に発表された『友の書』の中に、オーストリア人の典型たるウィーン人と、ドイツ人の代表たるプロイセン人の比較が行われている件りがある。

ウィーン人は外国人の画家の名前を発音するとき、インテリが使っていたと思う読み方をそのまま使う。画家の故郷の人人に混つたときには、その人たちの読み方にならつてそれまでの読み方を改める。ウィーンの人間の中に戻ると、正しい読み方を捨て、もとの誤つた読み方に甘んずる。いづれもひとつには礼儀からであるが、問題が起きると面倒だからで

もある。プロイセン人がその名を誤って発音している。正しく発音する人々の中に入る。しかし彼は発音の違いに気付いても自分の発音を改めない。名前が出されるたびに、いら立たしげな視線を投げかけ、自分は綴字通りに読んでいるのだから、自分の読み方が正しいのだと、他人の読み方に朱を入れかねない。いずれも一長一短である。

4

最後に、ホーフマンスタールが両国の相違点を踏まえた上で、異質の文化同士の相互の関係をいかように捉え、その将来像について大戦中いかなる抱負を抱いていたかに、若干触れてみよう。

その際のひとつの判断材料は、『文学に反映したオーストリア』の中で、ホーフマンスタールがオーストリア人に向かって訴えた、双方独自性を保持したままでの、二元論による大ドイツ主義的とも言える文化発展への提唱である。当時中部ヨーロッパは一致団結して戦局に対処していた関係で、オーストリアはドイツと、単に言語のみでなく、すべての面で一体化を望む傾向を見せていた。従ってこの提唱は、そうした世論の動勢に対する、ホーフマンスタールの側からのささやかな抵抗とも解し得るものである。確かに歴史的に見ても、ドイツ文化圏はプロイセンとオーストリアとの二極構造で営まれて来ており、この二元性こそが、彼の主張するように、ドイツ文化に宿る精神の本質であるとも考えられよう。そこでホーフマンスタールは、

オーストリアの進むべき道はドイツとの一体化ではなく、ドイツからの個別化による二極性の保持であると言う。個別化を進めた方が、大局的には大ドイツ文化圏に寄与するところが多く、またそれは、郷土に密着して個別化するオーストリア人の特性にも合致している。何事によらず「繊細な個別化と純粋な形成によってのみ、本物の調和が得られる」と強調するのである。

そしてまたこの線に沿って、母国のオーストリア人に訴えかけるとともに、相手のドイツの方にも働きかけることを忘れなかった。ただ、ホーフマンスタールの目に映ったドイツの姿勢は、オーストリアの場合とは逆で、相手側に同化する姿勢がなさすぎる欠点を有するものであったため、一見すると発言の方向が正反対のように映る。つまり、個別化を勧めるのではなく、オーストリアの方にも少し顔を向けるようにという、要請を行ったのである。ホーフマンスタールは、『文学に反映したオーストリア』より一年前、ベルリンの新聞に先に挙げた『われわれオーストリア人とドイツ』と題するエッセイを発表し、その冒頭を次のように書き出している。

今日、時局はきわめて重大であるが、オーストリアが世界の国々の中で、もっともドイツから知られることの少ない、あるいは知られ方の浅い国のひとつだと言っても、咎められはしないと思う。オーストリアはドイツにあまり近いため、見落とされてしまっているのだ。

このエッセイは、ドイツとオーストリア關係が、オーストリアからの一方通行に終っている点を指摘し、調和のある發展のため、ドイツ人にオーストリアを正しく認識させ、関心を高めさせることを目的としたものであった。

しかしながら、以上をもつて、ホーフマンスタールが一時期、ドイツの精神文化とオーストリアの歴史文化が相互補完的に作用し合う、ひとつの文化的有機体の確立を望んでいたと推定するのは不適當である。それはこのエッセイで述べられる、ドイツにとってのオーストリアの意味付けの件りからも明らかになるところである。それによれば、ドイツがオーストリアのことを考えるのは、とりも直さず、ドイツがヨーロッパで果たすべきドイツの課題を解決することになると言う。なぜならば、オーストリアはゲルマン民族の移動、中世における東方植民、トルコの撃退、マリア・テレジア、ヨーゼフ二世の社会改革等々、およびヨーロッパの歴史における大事件が、今も昔と変わらず生き続けている国だからである。ドイツはオーストリアのことを、すでに硬直した過去の残骸だと見なしがちだが、オーストリアはヨーロッパの歴史そのものであり、現在も生き生きと生成發展している国だと言う。

これを見ても分る通り、このオーストリアはヨーロッパにおけるドイツの課題という結論、およびオーストリアはヨーロッパの生きる歴史だというその理由付けの中には、ホーフマンスタールが、ドイツとオーストリアとの關係の向こう側に、単なる二国間問題でなく、ヨーロッパ全体のことを考えていたこと

がうかがえるのである。従つてホーフマンスタールが、大ドイツ文化圏の發展を好ましいと考へていた点に疑いはないが、それは大ドイツ文化圏の確立をねらつたものでなく、その先にヨーロッパ文化に貢献することを目ざしていたものと思われる。

ホーフマンスタールはドイツ文化の將來を考へるとき、片足をドイツに置くが、もう片足はヨーロッパに置いていたのだ。つまりドイツ文化圏の問題をヨーロッパと切り離さず、ヨーロッパの中に取り組んでしまおうと言つてよい。そしてこの考へ方こそが、ヨーロッパは精神的、イデオロギー的に一体であると説く『ヨーロッパの理念』、オーストリアはヨーロッパの問題であると説く『オーストリアの理念』等を考へ合わせる、当時ホーフマンスタールの念頭に常に宿つていた、未來像の方向であることがわかるのである。

(1) ヘルマン・プロツホが『ホーフマンスタールとその時代』(菊盛英夫訳・筑摩書房、一九七一年)で扱つたテーマも、そのひとつは、結局、この現実感覚の欠如だったと言へる。またウィリー・ハースが『文学的回想』(原田義人訳・紀伊国屋書店、一九五九年)の中の「私たちの恭順なワイセンシュタイン・カルル」の章で触れたホーフマンスタール像も同じである。筆者はホーフマンスタールの美意識による現実感覚の喪失は、三島由紀夫の場合のそれに似ていると考へている。

(2) Briefwechsel zwischen George und Hofmannsthal.
2. Aufl. S. 88-89.

- (3) Blätter für die Kunst. 5. Folge.
Hrsg. v. C. A. Klein. S. 3—4.
- (4) ホーフマンスタール『友の書』(都筑博訳・弥生書房、一九七二年) 二一—四頁。
- (5) Peter Christoph Kern: Zur Gedankenwelt des späten Hofmannsthal. Heidelberg 1969. S. 13.
- (6) Hugo von Hofmannsthal: Österreichische Aufsätze und Reden. Hrsg. v. H. A. Flechtner. Wien 1956. S. 15.

- (7) 前掲書 六二頁。
- (8) ドイツとオーストリアの相違を述べる『プロイセン人とオーストリア人』および『われわれオーストリア人とドイツ』をドイツで発表し、『ヨーロッパとオーストリアの關係を述べる』『ヨーロッパの理念』と『オーストリアの理念』をスイスで発表するあたりは、ホーフマンスタールの国際政治感覚の鋭さを示すものであらう。

(一橋大学助教授)